

博士學位論文要約

論文題目：戦後・三島由紀夫文学の生成——その思想性と文学的实践について——
氏名：田中 裕也

要 約：

平岡公威が三島由紀夫として文学活動を始めたのは、第二次世界大戦のさなか〈日本浪漫派〉の影響下にあった雑誌「文芸文化」においてであった。しかし三島が文壇で作家として認知され、その作品が評価され始めたのは、〈日本浪漫派〉の影響から離れた戦後以降のことである。ただし戦後の三島文学についての評価は、多くが作家と作品との文学史上の異端としてであった。例えば本多秋五は『続物語戦後文学史』（昭37・11・30、新潮社）で、三島を「戦後派ならぬ戦後派」として、戦前の文学だけでなく同時代のいわゆる〈戦後派〉からも切り離す。しかしこのような三島文学に対する、文学史上の鬼子的扱いは正しいものであったのか。

本論文は第二次世界大戦後の三島由紀夫文学を中心に、テキスト生成の過程及び変容を考察し、三島文学の思想的意義と戦後言説空間上での位置づけを明らかにすることを目的としている。

本論の構成としては全二部から成る。

第一部では戦時下と戦後で書き換えられた、三島の同一タイトルもしくは類似した内容の作品を扱い、その変更の理由と意味を探る。

第一章では三島由紀夫「サーカス」（「進路」昭23・1）の生成について論じた。「サーカス」は野田宇太郎の証言から、戦時下にも執筆されていたことが明らかになっている。戦時下版の「サーカス」ではキスシーンがあり、それが当時の検閲にかかってしまうため、雑誌掲載が見送りになった。しかも戦時下版の「サーカス」は現在発見されておらず、その全容は不明であった。しかし『決定版三島由紀夫全集』第十六巻に「「サーカス」創作ノート」が、第二十巻に「「サーカス」異稿」が収録され、現在流通している「サーカス」とは異なる構成が明らかになった。まずこの章では「「サーカス」創作ノート」と「「サーカス」異稿」とを調査・考察し、執筆時期を推定した。次に検閲は戦時下版「サーカス」だけでなく、現行「サーカス」もGHQによる検閲が影響しており、表現が変えられていることを明らかにした。三島は現行「サーカス」執筆と同時期に「仮面の告白」にも繋がる自伝小説の構想を練っていた。現行「サーカス」で王子の格好をした少年と「仮面の告白」の童話に出てくる王子との比較から、現行「サーカス」と「仮面の告白」とは互いに影響し合い作られたものだとした。現行「サーカス」への改稿の理由は検閲だけでなく、「仮面の告白」での死の運命にある王子への愛好が関わっていたと結論づけた。

第二章では三島由紀夫「夜の車」（「文芸文化」昭19・8）の生成と変容について論じた。「夜の車」は戦後に三島自身の手によって改稿され、「中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃」（『夜の支度』所収、昭23・12・1、鎌倉文庫）とタイトルが変更された。この章では「文芸文化」の同人たちによる文学的思想と「夜の車」との関係性を検討した。保田與重郎や学習院時代の恩師・清水文雄たちの古典読解、とくに彼らの言う〈花〉の思想の現前化の問題が「夜の車」で用いられていることを明らかにした。また「文芸文化」以外に学習院の文芸部の先輩であった東文彦との交流から「夜の車」について考察した。当時、東はニーチェの思想に熱中しており、三島にも熱心にニーチェの書物を紹介していた。東の紹介によって三島が、戦後に小説で多用することとなる、和辻哲郎『ニーチェ研究』（昭17・12・25、筑摩書房、改訂第三版）を知ったと推定した。形而上学的な思想を破壊していくニーチェ思想が、「夜の車」で保田の思想を批判していく契機となったと論じた。しかし「夜の車」段階では保田への批判性は徹底され

ておらず、〈花〉の思想への愛惜が見られ、「中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の拔萃」への改稿でそれが徹底されたと結論づけた。

第二部では、三島と戦後言説との関係性、三島とニーチェの思想との関係性を中心に考察し、三島文学の射程を明らかにしていく。

第三章では阿部知二「おぼろ夜の話」（「新潮」昭24・3）の生成について論じた。阿部「おぼろ夜の話」は第四章の三島由紀夫「親切な機械」（「風雪」昭24・10）に先んじて、同じ殺人事件を題材とした小説である。しかも「親切な機械」は阿部の「おぼろ夜の話」を読んだ上で、三島が入浴して調査を行い、執筆されている。この章では阿部「おぼろ夜の話」の生成を論じることで、阿部と三島の事件に対するアプローチの差異を明らかにする。まず阿部「おぼろ夜の話」登場人物のモデルを調査し、人物造型の特徴を明らかにした。また阿部文学の主題の一つである〈ヒューマニズム〉と「おぼろ夜の話」との、関係性について考察した。阿部は「おぼろ夜の話」で、登場人物の能代にシュヴァイツァーの「生への畏敬」の思想を語らせ、石狩に殺人の計画を思いとどまらせようとする。しかし能代は説得に失敗し、石狩は千曲を殺害する。当時の阿部自身の〈ヒューマニズム〉に対する、信念とその懐疑心がこの小説に描かれていると結論づけた。

第四章では三島由紀夫「親切な機械」（「風雪」昭24・10）の生成について論じた。「親切な機械」発表の二年から三年前に文学や哲学の領域を中心に「主体」をめぐる議論、いわゆる「主体性論争」が起こった。この殺人事件の犯人は殺害の動機に、この「主体」の問題を扱ったためにメディアで取り上げられることとなった。三島「親切な機械」の登場人物たちも「主体」について議論しており、明らかに三島は「主体性論争」について意識していたと言える。この章では、「親切な機械」を通して三島が「主体」の問題に対してどのようなスタンスであったのかを明らかにした。また「親切な機械」では、ニーチェの「人間的な、あまりに人間的な」や「ツァラトゥストラ」が引用されていたことを確認した。これまで戦後の三島文学では「仮面の告白」を中心に、ニーチェ「悲劇の誕生」と比較されてきた。しかし「仮面の告白」以降、それほど三島の文学テキストの中で、「悲劇の誕生」が用いられた痕跡を確認することはできない。しかもニーチェの思想は複雑で「悲劇の誕生」だけで、理解できるものではない。この章では戦後三島文学のみならず、三島のニーチェ思想の理解に大きく関わっている和辻哲郎『ニーチェ研究』（昭17・12・25、筑摩書房、改訂第三版）と三島「親切な機械」との関係性を明らかにした。そこで三島はニーチェの思想を用いて、決して確固たる「主体」など成り立たないという皮肉を描いていたことを明らかにした。

第五章では三島由紀夫「青の時代」（「新潮」昭25・7～12）について論じた。「青の時代」は無軌道な戦後青年たち、いわゆる〈アプレゲール〉の一人と見なされた、山崎晃嗣の〈光クラブ事件〉を扱った小説である。「青の時代」では山崎をモデルとした川崎誠の幼少期から大人になり、自殺に至るまでの過程が描かれる。その奇妙な成長譚ではしばしば、川崎誠の閉鎖的な人格が描かれる。この章では川崎誠の人格の問題がクレッチマーの「体型と性格」の理論からきていることを明らかにした。また「青の時代」では、作中に「道徳」という言葉が散見される。この「道徳」という言葉は、実際の山崎の事件には関係なく、戦後の国家再建の中で用いられた言葉であった。「道徳」の再建こそが国家の再建につながるという考えの中で〈アプレゲール〉たちは「不道徳」な者として扱われていく。しかし三島がニーチェの「道徳の系譜学」の思想を借り「道徳」／「不道徳」という二つの概念が対立しているように見えながら、実はいかに依存しあった概念なのかを暴いたと結論づけた。

第六章では三島由紀夫「禁色」（第一部・「群像」昭26・1～10、第二部・「文学界」昭27・8～28・8）について論じた。「禁色」についてはこれまでも先行研究で同性愛的な問題や芸術性などの問題から論じられてきたが、「禁色」の〈美〉がどのような参照資料によって書かれ、その問題がどのような射程を有しているかは明らかにされてこなかった。しかも昭和二十年代後半の三島は、小説や評論の中で〈美〉や芸術に関する多くの資料を引用して、独自の芸術論を展開

させていく。この章ではプラトンからヴィンケルマン、カント、ニーチェ、フロイトへと続く、〈性〉と〈美〉の問題系が「禁色」の中で用いられていることを確認した。プラトン以降〈美〉は〈性〉の問題から切り離されていき、カントによって審美論へと体系づけられた。しかしニーチェ以降再び〈美〉と〈性〉は結び付けられ、本能性が称揚される。このニーチェ的な〈美〉が南悠一の「肉体美」の要素に用いられ、プラトンやカント的な〈美〉＝「精神美」である檜俊輔に一旦は勝利することになったと論じた。しかしフロイトの「死の衝動」にもつながる〈美〉と〈性〉の理論が「禁色」には用いられており、俊輔の「現実」の昇華である俊輔文学が、さらに昇華されることによって金銭へと変わると読み解いた。また檜俊輔が作品の最後に毒をあおり自殺するが、その際に悠一に財産を遺贈する。これまでの先行研究では、それは悠一という「肉体」の勝利であり、明るい結末を読み取ってきた。しかし本論ではむしろ俊輔が死ぬことによって、〈美〉の代価＝昇華である金銭を受け取った悠一は「精神」を背負わなくてはいけなくなったと読み解く。

以上の論考を経て、本論文は次のように結論づけた。戦後・三島由紀夫文学はこれまで言われていた文壇や文学史の突然変異的なものではなく積極的に同時代言説が取り入れられたものであり、またニーチェの思想が脱構築的に用いられることによって、対立的な同時代言説の境界-限界を示してその無価値を暴いていたのである。